

DECOLATIVE ILLUSION

SHIZUKA TAKUBO



裝飾的錯覺——田久保 靜香



私たちの生活に身近に存在する器は、日本の居住空間で持つ美術として手に入れられるサイズ感と、

手頃な値段で家に迎え入れやすい1つの作品である。

作家の作品が使えるというプライスレスは昨今ムーブメントとして起こり、未だに熱が冷めやらない。

ホワイトキューブの空間よりも、天井の低い室内で生活感のある細々とした物が

チラッと横目に入りながらの方が、ぎゅっと器を見るにはちょうど良いのかもしれない。

そんな器の親和性は身近である分、今でいう"美術"とは一線を引かざるを得ないのだろう。

だが果たしてそうなのだろうか。美術は人と物との距離感なのだろうか？

私の作品は装飾華美で、生活陶器からはかけ離れているように見えるが、

同じ器という形状をもつ以上、逃れられない現実としてここにある。

本来、生活に取り入れる美こそが日本の美術であったはずだ。

手のひらの小さな世界を愛で、所有し、使うことで変わるこの変化は、まさに錬金術と云えよう。

私は装飾による親和性とイリュージョンの変容を器を用いて問いてみたいと思う。

TAKUBO SHIZUKA♡



DECOLATIVE ILLUSION

装 飾 的 錬 金 術

*一部の作品を除き、ほぼ原寸大で表記しています



STYLE SERIES

FATIMA SIMONETTA/MARCELLA CHARLOTTE SHINO

〈様式シリーズ〉

STYLE SERIES 1/4 FATIMA ファティマ

アンティークのC&Sには、

絵師によって額縁（絵画におけるフレーム）に見立てているような窓に、

風景画や肖像画、植物画などが精密に描かれているものがある。

私はそれらと同じ技術までの到達を目指すのではなく、

「額縁の中を絵画に見立てるところ」に重点を置き、

風景をマーブル模様置き換えることで転換する。

*ファティマの名は、イスラム教の師ムハンマドの娘の名から。

STYLE SERIES

FATIMA
SIMONETTA/MARCELLA
CHARLOTTE
SHINO



STYLE SERIES

FATIMA
SIMONETTA/MARCELLA
CHARLOTTE
SHINO



2/4 STYLE SERIES SIMONETTA / MARCELLA

シモネッタ / マルセラ

porcelain (英) = 磁器という言葉はタカラ貝という意味のイタリア語porcellaから発生した。

西洋人が白くて美しい貝肌に似た東洋磁器に出会い、

再現できずに苦悩した時代への思いを込められている。

貝殻の形はまさにその象徴であり、現代に至るまで様々な窯で愛用されてきた。

この作品は、ボッティチェリによって描かれた名画、

ヴィーナスの誕生に描かれるヴィーナスがモデルとしてある。

※ Simonettaの由来は、ヴィーナスのモデル(一説ではボッティチェリの愛人とされる)の方の名から。

STYLE SERIES

FATIMA
SIMONETTA/MARCELLA
CHARLOTTE
SHINO



STYLE SERIES

FATIMA
SIMONETTA/MARCELLA
CHARLOTTE
SHINO



STYLE SERIES

FATIMA
SIMONETTA/MARCELLA
CHARLOTTE
SHINO



STYLE SERIES

FATIMA
SIMONETTA/MARCELLA
CHARLOTTE
SHINO



³/₄ STYLE SERIES CHARLOTTE

シャーロット

マリーアントワネットの処刑後、ナポレオンによってロココ調を退廃的とし、それに代わって打ち出されたのが帝政様式（アンピール様式）であった。

建築や家具に用いられるフルートという装飾技法の呼び名は、

ギリシア・ローマ風の凸面縦縞繋ぎのことである。

当時の流行からC&Sの装飾にも使われ（Paris Flute）、

この形状はC&Sのデザインに大きな影響を与えたことで知られる。

* Charlotteの名は、茶の愛好家でありイギリスで紅茶を普及させた王妃の名から。

STYLE SERIES

FATIMA

SIMONETTA/MARCELLA

CHARLOTTE

SHINO



4/4 STYLE SERIES SHINO シノ

中世期頃、西洋人は東洋への憧れから、見たことのない世界を想像した。

伝聞でしか知り得ない東洋の姿はエキゾチックな象徴として、

八角系の形を用いて表現されることがある。

中国の人にとって8の数字はとても縁起が良いとされる事からも、

様式に多用されてきた。

* 名前のShinoは、シノワズリー(東洋趣味)が語源にある。

STYLE SERIES

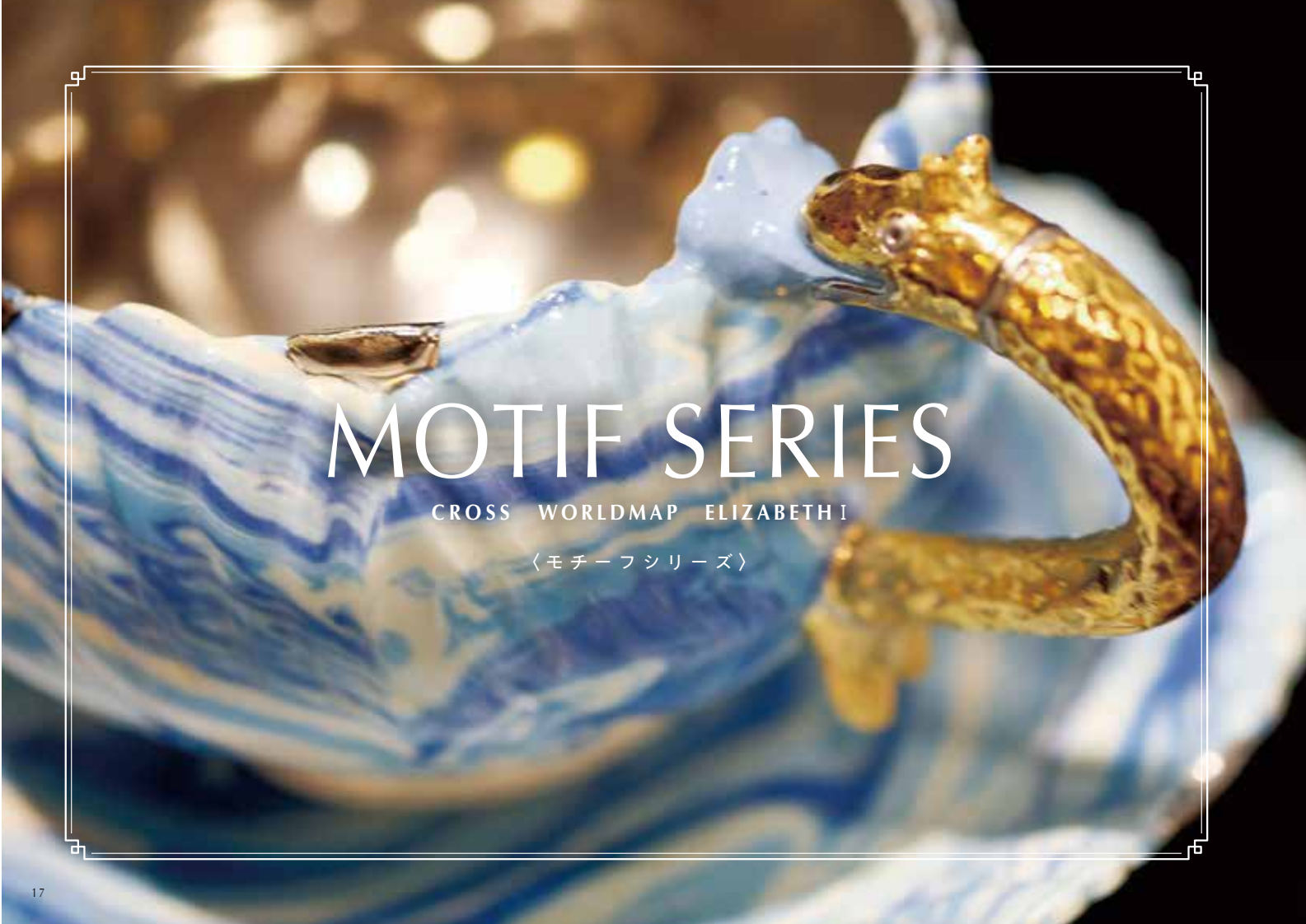
FATIMA
SIMONETTA/MARCELLA
CHARLOTTE
SHINO



STYLE SERIES

FATIMA
SIMONETTA/MARCELLA
CHARLOTTE
SHINO





MOTIF SERIES

CROSS WORLDMAP ELIZABETH I

〈モチーフシリーズ〉

$\frac{1}{3}$ MOTIF SERIES CROSS クロス

これまで西洋の歴史に傾倒してきたが、

今になり西洋文化に触れた日本の変容に関心が出始めてきた。

千利休の確立した茶道も、キリスト教の洗礼とリンクする箇所も多くあり、

こじつけか否かは判別し難く、現代に至るまで様々な論が交わされてきた。

十字高台茶碗は、キリシタン大名が作らせたであろう茶道具の一つである。

茶碗を裏に返すと現れる十字の高台は、信仰故の形なのだろうか。

真相が闇である点がまた想像を掻き立てられる。

MOTIF SERIES

CROSS

WORLDMAP

ELIZABETH I



*原寸大より85%縮小

^{MOTIF SERIES} 2/3 WORLD MAP ワールドマップ

様式から離れた展開を求めて始めたシリーズの一つ。

西洋の古い航海地図に描かれる海獣-sea monsterから

着想を得て制作をした。古地図には鳥やサイ、

象を思わせる陸の動物に似たものが多く描かれ、

未知なる海の生物、航海の恐ろしさが体現されながらも、

チャーミングな創造物に胸をときめかせられる。

MOTIF SERIES

CROSS
WORLD MAP
ELIZABETH I



*原寸大より60%縮小

MOTIF SERIES

CROSS
WORLD MAP
ELIZABETH I



3/3 MOTIF SERIES ELIZABETH I エリザベス1世

時に「処女王」と現される男の様な生き様をした

エリザベス1世のドレスは、男に負けじと

大きく見せる為の様々な工夫が衣装にまで及ぶ。

そのなんともユニークな意匠からインスパイアされ制作をした。

MOTIF SERIES

CROSS

WORLD MAP

ELIZABETH I



MOTIF SERIES

CROSS

WORLD MAP

ELIZABETH I



HAUTE COUTURE SERIES

〈オートクチュールシリーズ〉



HAUTE COUTURE SERIES

FICTIONAL HAUTE COUTURE- MARIE ANTOINETTE

虚構のオートクチュール マリーアントワネット

このシリーズは現代の工芸界においてもてはやされている

“KOGEI”への批評をきっかけに生まれた表現手段である。

古今東西の女性を架空のクライアントに設け、

用途性のある形(C&S)を用いてオブジェとなることを試みた。

この作品はマリーアントワネットの所有する家具、

ドレス等から意匠を汲み取り、彼女が持つ姿を想像して制作をした。

HAUTE COUTURE SERIES

FICTIONAL
HAUTE COUTURE
— MARIE
ANTOINETTE





INSPIRATION BOOKS

インスピレーションブック

作家の血となり肉となった書籍と一緒に展示した。直接的に参考しているものであったり、全く関係のなさそうなものであってもどこかにエッセンスが入り込んでいると想像すると面白い。付箋や書き込みがあるのも、作家の通ってきた道のりを感じることができて一気に距離が近くなった気持ちになり一層楽しめる。



SHIZUKA TAKUBO
×
COYAMA

SPECIAL MENU

田久保静香 × COYAMAスペシャルメニュー

実際の作品でティータイムを楽しめるメニューを展開した。本人としては販売のできないB級品であるらしい。ドリンクは作家おすすめの独特な香りのアールグレイに、山形の和菓子店の「りぶれ」、それにCOYAMAで出しているコーヒー、新丸子の和菓子店の季節の練り切り。

紅茶の聖地をめぐるフレーバード・ティーの誕生

近年、フレーバード・ウォーターがブームにあるが、香りがあるだけで味は甘くもなんともない。しかし、なんだかジュースを飲んでいるような気分になれる不思議な飲み物だ。

同じようにフレーバード・コーヒー、フレーバード・ティー、レモンの香りの付いたフレーバード・タバコまである。私はどれも素材の香り自体を楽しめるものが好きなので、これまでフレーバードに興味を持つことは無かった。しかしこれらの香りの付いた嗜好品は、より良い快楽を求める行為であり、それは同時に自由な発想を持ち合わせているように思える。ここ最近、嗜好品と香りの関係はとても密接にあるように思えてならなくて、ずっと頭の隅に引っ掛かっていた。人類と香りとの出会いを探ると紀元前まで遡り宗教までもを語らなければならないので、香りを付ける目的や誕生した経緯について茶を通して考えてみたい。

香りを付けた茶の世界では、フレーバード・ティーとセンチッド・ティーに分けられる。フレーバード・ティーは天然香料の開発が進んだ1960年代から誕生したといわれており、香料を茶葉に噴射し、茶葉自体に香りを付ける。一方、センチッド・ティーはスパイスやドライフルーツ、花びら等を茶葉にブレンドする他、ジャスミンティーのように香りを転移させる方法がある。センチッド・ティー

は古来より中国の特産品としてあるが、調理の一種としても捉えることが出来る為、ここでは人為的に香りを付け与えたフレーバード・ティーに焦点を絞ろう。

フレーバード・ティーで最も古い歴史があるのはアールグレイとされている。経緯は諸説あるが、1830年代に英国のグレイ伯爵が中国土産でもらった龍眼(ライチを小さくした様な果実で汁気が多く、香りと甘みが強い)に似た香りの紅茶を気に入り、これに似た紅茶を作るようトワイニング社に依頼した。しかしトワイニング社は龍眼を知らなかったので、当時フランスでキャンディーやケーキにも使われていた、ベルガモットの香りを付けて茶を献上したことに始まる。一説によると、そのグレイ伯爵がもらったお土産のお茶は武夷山の紅茶(=正山子種ラプサースチョン(英))であっらしい。

もしそうだと仮定した場合、ちょっと楽しい想像が出来上がる。

正山子種は龍眼にも似た高貴な香り、ほのかな松の木の香り、まろやかな甘い風味が特徴にある。これらは茶葉が持つ自然本来の香りだ。武夷山は紅茶が生まれた聖地として崇められ、そのブランドで正山子種は英国で一躍銘茶となった。しかし、武夷山という地域は険しい山岳地帯で茶畑

は無く、自生する茶樹から葉を集めなければならない為、ごく少量しか生産できない。希少性が高く、偽物も大量に流出した。いくらお金があっても本物を手に入れる事が困難な代物であったことから、グレイ伯爵は本物でなくとも、せめて似たものでいいからと依頼をしたのではないだろうか。

ここで、実は本当の一番最初のフレーバード・ティーであった偽物の正山子種についても記す必要がある。紅茶は当時船で長い時間をかけて運ばれた為、着いた頃には香りが薄れてしまった。その為商人は生産者へ、より強い香りを付けるよう指示を出す。葉はもちろん、武夷山のものではなく余所の茶葉を用い、松の煙で燻製にして正山子種と謳い高値で売った。果物や松の木の香りなどはしない。嗅いだ事を後悔するような、鼻をもぎ取られるかのような凄まじさだ。ある人は「正露丸のよう」だと例え、ある少女は「学校にあるウサギ小屋の中の下の方の臭い」だと言う。しかし長い間、偽物があまりにも大量にもちこまれ、商人でさえ本物がどれかわからなくなり、いつしか偽物が本物と思われるようになってしまった。現代でも英国の格式ばった茶会では、決まってこの偽物の正山子種を飲むそうだ。美味いからという嗜好ではなく、ロマンという嗜好でもって堪能するのだ。